

有元史郎先生の建学の精神を生かす 卒業生の役割

昭和41年機械工学第二学科卒 雲然 國幸

1. 有元先生の向学心と設立の背景

芝浦工業大学は有元史郎先生によって、前身校である東京高等工商学校が昭和2年に設立され、今年は90周年を迎えました。有元先生は旺盛なる向学心を持たれた方で、東京帝国大学工学部機械工学科を卒業されましたが、その他にも経済学、法学、商学、文学など合わせて5つの学士号を取得されたと伝わっています。

この向学心は自らの向上だけにとどまらず、昭和初期、学歴社会の風潮が強まり、中等教育が増加する中、この学生たちに技術を持たせ世に送り出すべきとの思いから、本校の設立に踏み切ったようです。設立申請書に中堅技術者を養成するとの目的が書かれています。

そして、当代一流の教授陣を揃え、日本語による工学系基礎学科のテキストを学内で編纂、発行し、全学科共通科目の中には当時珍しかった「安全工学」「産業医学」に相当するものもあり、教育に関し先見性と並々ならぬ熱意を感じるものとなっていたようです。

2. 設立への思い（建学の精神）

昭和3年には校友会が発足し、昭和6年には校友会雑誌に「非科学的教育の提唱」という論文を寄せております。この論文には有元先生の強い思いが表現されております。↙

て実学の芝浦を特徴づける科目がありました。社会に出て、美しい図面が描けるようになると不思議と設計能力向上に繋がることに気がきました。設計と製図は感性による繋がりからでしょうか。製図教育は重要です。

そして、現代文化の様相の変化は速く、遅滞なく進むことを目指し、機械工学科は弓削正隆、斎藤雄三先生による2科体制で進むことになりました。この時ドラフターが教室に整備されました。ここでも製図の重要性を考えていたのでしょう。

他の学科も同様に「実学教育」が進められたと思いますが、「実学の芝浦」という成果となって戻って来ていると思います。

4. 実学教育の成果と循環

90年に渡って教育した結果は卒業生の実績を通して大学の評価に戻ってくる。この様に大学と卒業生の活躍の間には循環があり、現在良い循環が回っているのです。

これは、今、少子化と言われ苦戦する大学がある一方で、芝浦の入学志願者が年々増加しており、今年の志願者は38,600余名になったと聞いており、ここにも表れています。



芝浦工業大学 校友会 東京総支部
「風と潮」第11号
発行：2017年10月3日
発行者：大丸征史 支部長
編責：齋藤秀達
電話：080-2038-5930
E-mail:hidesato_saitoh@yahoo.co.jp

↘この内容を正確に説明することは難しいのですが、私なりの理解でお話すれば、「学校教育は我々の生活をより良くし、より意義のあるものにすることが任務であり、これは単に学問体系に沿って教材を用意し教育するものではなく、我々の生活の中に科学が解けこんだ現代文化の様相を教材として社会の一員たる個人に社会的意義を体得させることである。我々の教育任務はこれらの考えに基づき特色ある専門教育を施し、もって、社会に貢献すること」であると述べられております。

先生の思いは芝浦工業大学の建学の精神の基本となるもので、その後、90年に渡って脈々と受け継がれています。現在公表されている建学の精神も有元先生の「非科学的教育の提唱」に基づいたものになっております。

3. 建学の精神は実学の芝浦と名前を変えて

芝浦工業大学には「実学教育」という言葉があります。多くの卒業生がこの言葉を認識しており、時々会話の中にも、歴史を綴った文書の中にも出てきます。実学とは「現場で役に立つ」という意味です。入社して日が浅いと学校で得た知識と現場の課題とが結び付かない、応用できない事例が見受けられます。これに対する言葉と思います。

私は、「実学教育」は「非科学的教育の提唱」の実践版であると思います。「非科学的教育の提唱」は「実学教育」という名前に代わり同様に受け継がれたと考えられます。

私は機械科の出身ですが、機械では「製図の芝浦」とし

介護の裏技～表がなければ裏はない～

一般財団法人 介護離職防止対策推進機構 理事長 和氣 美枝

「私は何者なのか」

私は昭和46年埼玉県生まれ、平成6年3月に芝浦工業大学工学部建築学科を卒業しました。当時はバブルがはじけた後だったので就職難2期目です。優秀とは程遠い学生をしていたので、校友会の大先輩であり創設者であり当時の社長であった横山修二氏の会社に就職させていただきました。マンションデベロッパーです。その後社長の引退とともに同業他社に転職し、介護離職するまで15年（間）マンションの企画設計・現場管理等の仕事をしていました。そして今は、建築とは程遠い「介護者支援」を生業としています。サラッと「介護離職」とか「介護」という言葉を出しましたが、32歳の時から母の介護に携わっています。今年で14年目です。ちなみに父は20年前に他界しており、要介護状態の母と2人で埼玉の実家で生活しています。

現在は株式会社ウェブユニオンという私をふくめて3名の会社で介護者支援事業部の責任者として「ワーク&ケアバランス研究所」という屋号での活動と、志同じ者で立ち上げた一般社団法人介護離職防止対策促進機構で代表理事という肩書での活動を同時に行っています。

胸を張って「起業家です」と言える状態ではないので「活動家」として、日本経済団体連合会（略称「経団連」）や日本労働組合総連合会（略称「連合」）などの団体から自治体、企業での講演会や執筆などを通じた介護者支援を行い報酬をいただき、その売り上げの一部を使って冊子を作ったりホームページの運営をしたりして個人向けの介護者支援を行っています。去年（2016年）は毎日新聞出版から「介護離職しない、させない」という書籍を発売させていただきました。

そもそもなんでいま私が「介護者支援」をしているのか。その一つの理由が「大事な友達に同じ目に合って欲しくないから」というものがあります。そして私が「介護者支援を生業」としている理由は、介護者支援のビジネスモデルをつくるという使命があるからです。

現在の日本で介護者支援を事業として企業（といっても零細企業かつ借金地

獄）が取り組んでいる事例は私以外にありません。また、母親の介護をメインで担っていないながら自らの介護体験をもとに介護離職防止や仕事と介護の両立を啓発している人が私以外にいません。（と言われます。）そんなことで、NHKや大手新聞はもとよりビジネス雑誌から海外のメディアで取り上げていただいています。

ここまで書いて気づきましたが「介護者」という言葉の意味を説明します。

「介護者」とは家族や大事な人の介護を無償で行って

る者のことを言います。介護従事者のことではありません。介護者をケアラーとも言います。介護を必要としている人のことを「要介護者」といいます。我が家の場合でいえば、要介護者は母です。介護者と要介護者の関係が同居していようが、別居していようが、お金だけ出していようが気持ちだけ寄せていようが、大事な人が要介護状態になればそれは全員「介護者（ケアラー）」です。



「介護の裏技？」

執筆依頼の際に「介護の裏技」とタイトル指定がありました。はっきり言いましょう。「介護」を知っている方向けであれば裏技をお伝えする意味があるかもしれませんが、「介護」を知らない方々に裏技をお伝えしたらそれが表になってしまいます。しかも裏技を文字に残すリスクなんかは私には背負えません。小さな団体とはいえ代表やっていますし、一応、社会に「働く介護者」を先陣切って発信している身なので、表面では品行方正を保っていますので、悪しからず。

ただ一つだけ言えるのは「裏技」なんてないです。しいて言えば「どれだけ信念をもって正論吐けるか」が裏技に該当するかもしれません。つまり「裏技」として話をしたところで、話をする場面においては先方から「それ当たり前じゃん」と言われるということです。

この執筆は4000文字ですよ。4000文字。これは労働であり、ボランティアの域は超えています。しかも私は活動家です。講演会や執筆でノウハウの教示を行いお金をもらっています。しかも私は一般社団法人の代表です。取り巻きがたくさんいます。彼らに言わせれば本来はこの執筆は受けてはいけない業務なのです。そのうえ私にはいま愛校心はありません。

なのになぜお引き受けしているのか。それは「恩返し」。ただそれだけです。

私はかつて学園祭（芝浦祭といいますが）の実行委員をやっていました。友誼飯店というOB屋台で、たくさんのかっこいい（ちょっと変わった？）先輩に出会いました。実行委員をやっていた関係で、大先輩の会社に就職することができました。もちろんその会社には芝浦卒の先輩がたくさんいらっしゃいました。また、マンションデベロッパーにいた時は現場監督が芝浦卒業生だった、なんてことは1回や2回ではありません。いままで生きてきな中で、芝浦OBには本当に本当にかわいがっていただきました。今回の執筆はその恩返しです。愛校心がないのは、私の大事な場所がなくなっていたからです。それが「友誼飯店」です。学園祭のOB屋台「友誼飯店」にいた人たちも、そ



るそろいお年になってきているでしょうし、再開してくれば面白いネットワークができるのかな・ ・と思う今日この頃です。介護で引きこもっていた時に田町校舎がなくなり、気付いたら友誼飯店が無くなっていました。介護で何か大事なものを失う、なんてことも他の人にはして欲しくないですね。

なぜこんなことを書いているのかと疑問に思う方がおられるかと思いますが、現在の日本において「介護しながら働く」を乗り切るには「コミュニケーション能力」および「ネットワーク」が必要なのです。先ほど述べましたが「どれだけ信念をもって正論を吐けるか」という行動は高いコミュニケーション能力が必要です。目的を達成するためにどのようなコミュニケーションをとればいいのか必死で考えます。ひとりの脳みそでは到底考えつかないようなことも、ネットワークを使うとあらゆる情報が入ってきます。特に介護の情報は介護経験者が一番持っています。

私の周りにいる諸先輩、後輩は私の介護日記（超クローズのフェイスブックをやっています。友達申請をされても承認しませんのであしからず）をチラ見しています。恐らく彼らは「家族介護が始まったら和氣に聞けばいい」と思っています。それでいいのです。だって、介護は予期できません。突然始まります。準備はしておいた方がいいとは思いますが喫緊の問題じゃない限り、多くの方は目の前の生活を一生懸命生きるでしょう。当然だと思います。ただ「介護は突然やってきます」または「始まっている介護に気づかない」ことも多々あります。いままで生きてきた中で遭遇したことのない現実を目の当たりにしてパニックにならない人はいません。でも、私や介護経験者とのネットワークを持っていることによって「いざとなったらその人に聞く」という行動ができれば初動のパニックはクリアできるはずですよ。



そうはいつても、現実的には私一人では対応はできません。ですから、講演会では「介護になったら地域包括支援センター」という言葉をご唱和いただきながら必ず覚えていただきます。これで突然の介護に対する最初の一步の対応が可能となります。

皆さんは「介護」ってどんなイメージをお持ちでしょうか。高齢者の排泄介助？高齢者が靴も履かずにお外に出てしまい帰ってこれなくなる？全く違います。介護とは自立を目的とした生活支援のことです。砕いて言えば「できることには手を貸さない」ということです。「できるようになったら手を貸さない」ために、「できるようになるまで手を貸す」とでもいいでしょうか。

介護を人生の終わり、重たい生活の始り、のように捉え

るとスタートを切るのが遅くなります。介護は初動が最も大事です。初動でコケると心が折れたり、二度手間三度手間で体力を消耗したりします。もちろん私はそっち側でした。心はささくれ、向かうところ敵ばかりの状況にしてしまった過去があります。だから私と同じような思いをして欲しくないと思って活動しているわけです。



私の場合は母の病気の発症当初「治療の延長」と捉えていたので、目の前の状況が「介護」だということを認識したのは7年経ってからです。私の場合は「介護」という概念が全くなかったので、介護経験者に教えていただき「介護」をすんなり受け入れることができました。他の方の例で、治療の末「よくなる」と信じているがゆえに、「これは介護ではない！」と介護サービスを受けない方もいます。「介護」という言葉が重たいのでしょうね。介護サービスはよくなったら（自立したら）受けられません。ですからよくなるまで受ければいいのです。介護は生活支援です。「いま、ひとりではできないこと」があるのであれば介護サービスを受けた方が生活が楽になることがあります。そしてその結果、「ひとりではできるようになったら」介護サービスは受けられなくなります。

「介護は先が見えない」と言いますが、みようとしないでください。平均寿命、家系、病気の進行などから予測を立てることは可能です。もちろん多くの場合は介護の終わりは、対象者の「死」を意味します。先が見えない不安で「介護」を拒むのであれば、先を見た上で「いま」を幸せに生活する方法を探した方が私はいいと思っています。

と、限られた紙面で私がお伝えできることはこれぐらいでしょうか。

大手企業であれば「介護離職防止」「仕事と介護の両立支援」のコンサルティングをお引き受けしています。中小企業においては従業員の介護相談を直接私に対応しています。個人向けには介護者の会やメルマガなどで情報発信、情報共有しています。もちろん書籍もあります。「働く」と「介護」における現場発信の第一人者として活動しておりますので興味のある方はお問い合わせください。インターネットで「ワーク&ケアバランス研究所」または「介護離職防止対策促進機構」または「和氣美枝」で検索していただければいっぱい出てきます。

日々己との戦いですが「介護しながらでも働けるし、介護しながらでも結婚できます」と言いたいので、ご縁のお問い合わせも大歓迎です！

お目汚しの稚拙な文章を最後まで読んでくださりありがとうございました。